

# 県立大浜田 就職率99.1%

過去2番目の高さ

島根県立大は10日、2015年度卒業生のキャンパス別就職率の確定値(5月1日まとめ)を発表した。浜田キャンパスの総合政策学部は99・1%で、06、07年度の99・5%に次ぐ高い数字となった。県内への就職率は25・2%で、前年と比べて1・5%上がった。総合政策学部の就職率は前年比3・5%上昇。同大は、景気回復による求人増に加え、同大キャリアセンタ―の就職支援が奏功したと分析。県内就職率の向上は、地元企業などへのインターンシップ推進が効果を上げているとみている。

浜田市野原町の同キャンパスであった定例会見で、本田雄一学長は「100%に近い就職率を達成できた」とする一方、文部科学省の地方創生推進事業への採択で、県内就職率を5年間で10%向上させる目標設定を受け、地元公務分野への就職促進も見据え「道遠したが、実現に向けて努力したい」と話した。

松江キャンパスは健康栄養、保育の両学科が100%、総合文化学科は97・5%で、全体では前年比1・1%上昇の98・5%。出雲キャンパスは、初めて卒業生を輩出した看護学部看護学科が、別科助産学専攻とともに100%で、全体では同4・5%上がった。

(吉川健治)

平成 28年 5月 11日 付け・山陰中央新報

## 松江

大半が初めての乗船。ふれあい広場乗船場(同市黒田町)から6隻の船に分かれ、50分かけて堀川を巡り、興雲閣(同市1、2年生が松江市の堀川遊覧船に乗って親睦を述べ合った。

### 堀川巡り地域の魅力学ぶ

島根大と 県立大生 70人 遊覧船で親睦

象や学生生活について語り合った。松江の歴史や自然が詰まった堀川遊覧船を通じた。松江の歴史や自然が詰まっていた堀川遊覧船を通じた。松江の歴史や自然が詰まっていた堀川遊覧船を通じた。松江の歴史や自然が詰まっていた堀川遊覧船を通じた。



遊覧船に乗り込む大学生たち

身は「大学周辺しか知らない」と話した。高松市出身の「参加者に楽しんでもらい、手応えを感じた」と話した。葛西理世委。

平成 28年 5月 16日 付け・山陰中央新報

**県立大未来ゆめ基金 島根電工が500万寄付**  
**留学費援助に活用**

学生の海外留学資金などに充てる県立大の「未来ゆめ基金」に、島根電工（松江市東本町5丁目）が500万円を寄付した。荒木恭司社長（67）が18日、同大短期大学部松江キャンパス（同市浜乃木7丁目）を訪れて本田雄一学長に目録を手渡し、有効活用を願った。

同基金は2012年10月に設置。留学費の援助や、震災復興ボランティアへの参加など地域貢献の活

動費に活用する。15年の寄付額は約210万円。今回の寄付は過去最高額という。

同社の創立60周年を記念事業の一環で寄付を決めた。荒木社長は「学業はもちろん、海外や地域で経験を積み重ね、感性を磨いてほしい」と強調。本田学長は「基金の趣旨に沿って活用し、期待に応えたい」と感謝の言葉を述べた。



（岩井彩佳）

本田雄一学長（左）に目録を手渡す荒木恭司社長

平成 28 年 5 月 19 日付け・山陰中央新報

**小泉八雲の足跡 ひ孫凡さん語る**  
**SUN—INぶらんち会**

山陰両県に支社や支店などを置く企業が参加する交流組織「SUN—INぶらんち会」の2016年度第1回定例会が24日、松江市内であった。記念講演した島根県立大短期大学部の小泉凡教授（64）が小泉八雲について語り、37社から参加した42人が耳を傾けた。

山陰両県の支社などに今春着任した会員企業の6人が紹介された後、会食に移り、親睦を深めた。

八雲のひ孫にあたる小泉教授は「未来に生かす小泉八雲」と題し、約1時間にわたって講演。ギリシャ人とアイルランド人の両親の間に生まれたことや、日本のほか米国や英国などに滞在した経験が「（八雲の）物事への好奇心や寛容な精神を育み、妖怪など超常的な存在への興心を深めていった」などと述べた。

SUN—INぶらんち会は全国で事業展開している企業の支店、支社などの関係者が参加。16年度は54社が加盟している。

（古和隆宏）

小泉八雲について語る小泉凡教授（左）の講演に耳を傾ける参加者。松江市朝日町、松江エクセルホテル東館



平成 28 年 5 月 25 日付け・山陰中央新報

米ワシントン州出身で、島根県立大短期大学部で講師を務めるダスティン・キッドさん(38)は「松江市東津田町」は「大量の核兵器を保有する米国のリーダーが、被爆地で原爆の恐ろし



ダスティン・キッドさん

さに触れたのは非常に意味がある」とオバマ大統領の訪問を評価した。

キッドさんによると、米国の学校では「広島、長崎への原爆投下で戦争を終わらせた」と教えられる一方、

米国出身・キッドさん (松江在住)

## 実相触れたことに意義

被爆地の惨状に触れる機会はなく、中には「核兵器の使用を軽く考えている人がいる」という。

1997年に初来日して以降、何度も広島、長崎を訪れ、家族や友人が来日した際は極力、被爆地を案内した。自身も初めて広島を訪れた時は「心を大きく揺さぶられた」と振り返る。

原爆投下の正当性については複雑な思いがあるが「核のない世界」を強く望む。「原爆が何をもたらしたのか。核保有国を含む全ての国のリーダーが広島、長崎を訪れるべきだ」と訴えた。